



特別
A5
6590
1(1)



寛政五癸丑季

心律目録

備前 森々庵松後撰



心部之志

序

家色善のあけあけく何れり
心風の本澤とありて又心まき小
おしんともいりしと心と縁と
なして代替く小田れりゆめに
人か守りて心月しより心を心
唐えん所代この心道おれり



歌仙

子路

をきくはきくはの孫持の

弟のまゝはまゝは

永くはまゝはまゝは

ト地はまゝはまゝは

あまのまゝはまゝは

まゝはまゝはまゝは

松後

批王

梅二

左押

一青

月はまゝはまゝは

松はまゝはまゝは

系竹はまゝはまゝは

まゝはまゝはまゝは

舟はまゝはまゝは

小神櫃はまゝはまゝは

まゝはまゝはまゝは

水はまゝはまゝは

高甫

友字

呂朝

孫松

彦江

彦馬

松活

不元

新^{アラ}鷹よきくきく抱^弟瘻の 峯白

よきくきくきくきくきくきく 二白

梅の枝は物ごとくは物ごとく 松守

次等との通(通)の石 那佐

よきくきくきくきくきくきく 龍角

よきくきくきくきくきくきく 巴下

三^ラあきくきくきくきくきくきく 海老

花らくきくきくきくきくきく 養山

よきくきくきくきくきくきく 柳守

よきくきくきくきくきくきく 寸松

煉婦のきくきくきくきくきく 女 値取

よきくきくきくきくきくきく 之山

松林のきくきくきくきくきく 園口

よきくきくきくきくきくきく 逸川

よきくきくきくきくきくきく 起心

よきくきくきくきくきくきく 子義

海^二濱^一に^レ舟^ノの^レほ^ノる^ク松^ノ後^海
 新^レ地^ノ嶺^ノの^レ道^ノ車^ノ姓^ノ
 信^ノ文^ノ坊^ノの^レ所^ノ知^ルゆ^ク信^ノ信^ノ偈^ノ
 天^ノの^レ代^ノハ^レも^レり^まさ^らし^まる^ク花^ノの^レ道^ノ
 千^ノ河^ノ

くわんりやう

海^ノと^ノ美^ノの^レ人^ノ女^ノを^レね^て信^ノを^レし^り
 着^レい^ん公^ノの^レゆ^らら^しま^るの^レ月^ノ
 好^レし^まら^ばは^らわ^らぬ^はの^レ心^ノ
 松^ノ尾^ノの^レ道^ノ車^ノ姓^ノ
 信^ノ文^ノ坊^ノの^レ所^ノ知^ルゆ^ク信^ノ信^ノ偈^ノ
 天^ノの^レ代^ノハ^レも^レり^まさ^らし^まる^ク花^ノの^レ道^ノ
 千^ノ河^ノ

美濃の井

北方 花里

揖斐 松二

岐阜 女字

上方 馬如

大垣 唐島

聖持 一書

此の山に... 備前 松

... 松

... 江

... 唐

... 松

... 松

... 白

... 河

竹の子に... 善山

... 寸

... 松

... 之

... 園

... 川

... 幾

... 松

備前

松

松

松

白

河

善山

寸

松

之

園

川

幾

松

甲のよぶたにふくむてきりきりぬ 女 枕を
西のよぶたにふくむてきりきりぬ 女 菊枝
あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 巴香
梅きりきりぬ 女 値取
さしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 李川
あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 紫葉
さしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 巴上
あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 如也

あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 起六

あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 叶支
あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 奉白
あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 柳亭
あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 松原
あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 雨洗
あしよぶたにふくむてきりきりぬ 女 素琴

二ノ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
揚子江

八

二ノ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
揚子江

二ノ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
揚子江

二ノ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
揚子江

二ノ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
揚子江

二ノ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
揚子江

あまのこゝろ

浮洲の波踏をよるや堤を
あけ

濱岐

あまのこゝろ

あまのこゝろ
あまのこゝろ

あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ
あまのこゝろ

松後

虎杖やららるるを乃杖

袂のあまのこゝろ
あまのこゝろ

あまのこゝろ
あまのこゝろ

あまのこゝろ
あまのこゝろ

あまのこゝろ
あまのこゝろ

あまのこゝろ
あまのこゝろ

あまのこゝろ
あまのこゝろ

あまのこゝろ
あまのこゝろ

腹帯の身は細くしては通ら

後

廊下は細くはなすよりの敷

葎

てはむしりてはなすよりの敷

丈

とちよりの敷はなすよりの敷

西

とちよりの敷はなすよりの敷

を廊下の敷はなすよりの敷

の敷はなすよりの敷

をいふは月とあるはの敷

丈

丸地 高瀬

大見京 観音寺

経より 素丈

ねの二葉はなすよりの敷

とちよりの敷はなすよりの敷 松後

草の二葉はなすよりの敷 葎

とちよりの敷はなすよりの敷 丈

ふの二葉はなすよりの敷 西

おみらよ鼻のさるに傳正 李峯
 おみらよ鼻のさるに傳正 李峯
 ひとあしうすはくしおの笛 喜露
 礎よあつておのあつてあつて 荷伝
 雨のあつてあつてあつて 光光
 およよあつてあつてあつて 太又
 ちとあつてあつてあつて 太柳
 草沙あつてあつてあつて 後

本よあつてあつてあつて 太
 後あつてあつてあつて 太
 草よあつてあつてあつて 浮
 金借ちれは院御いんあつて 孝
 能あつてあつてあつて 玉
 日よあつてあつてあつて 菴
 西風あつてあつてあつて 冬
 代あつてあつてあつて 柳

さきのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき

あまのつゆ

大正

あまのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき

伊豫

川口

あまのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき
あまのつゆのせきつらき

あまのつゆのせきつらき

あつし海軍にやういふもの

いふものやういふもの

いふもの

松後

月よあつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

世の中いふものやういふもの

短歌

あか坊

よもあつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

あつし海軍にやういふもの

クワササ

山崎

ちとあふむにせむもあふいと
 後 葉
 暁のさきさきさきのさき
 後 葉
 芝居のさきさきさきさき
 後 葉
 おぼろのさきさきさきさき
 後 葉
 ふあせにせむもあふいと
 後 葉
 比をいひさきさきのさき
 後 葉
 川をいひさきさきさきさき
 後 葉
 襦のさきさきさきさき
 後 葉

均毎のさきさきさきさき
 山
 ちとあふむにせむもあふいと
 葉
 ちとあふむにせむもあふいと
 葉
 ちとあふむにせむもあふいと
 葉
 ちとあふむにせむもあふいと
 葉
 ちとあふむにせむもあふいと
 葉

名録

接りたりと縁家なれはゆきのま 兼楽
并のむすこや後より夏のおと 兼雨
二井もや花にじふふの月 名宿
法華と世にせむる様うら 素麻
裁らふこしあやむらひさ 涼由
在ふはとあはれはくむら 素成
稚子と拾りきりてんる様うら 山崎
よ草やうらへんは動く程 水出

ゆきとやとちむらと様の上 金毛
むらとちむらと様の上 清茶
甲斐の住佛とくうとくうら 七唐

二井

まはらふとちむらとくうとくうら
谷の井もや花にじふふの月
二井もや花にじふふの月
法華と世にせむる様うら
裁らふこしあやむらひさ
在ふはとあはれはくむら
稚子と拾りきりてんる様うら
よ草やうらへんは動く程

この入の西のちきり神とまゐて
うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

かくもいふ所も今た教百をあら
 せしはしん一か國の鳥のふり
 かみふりし一ふりていふなり
 かみふりていふなり
 かみふりていふなり
 かくもいふ所も今た教百をあら
 せしはしん一か國の鳥のふり
 かみふりし一ふりていふなり
 かみふりていふなり
 かみふりていふなり

かくもいふ所も今た教百をあら
 せしはしん一か國の鳥のふり
 かみふりし一ふりていふなり
 かみふりていふなり
 かみふりていふなり
 かくもいふ所も今た教百をあら
 せしはしん一か國の鳥のふり
 かみふりし一ふりていふなり
 かみふりていふなり
 かみふりていふなり

あつたふりやう

夫の由やふりやうのふりやう

ふりやうのふりやう

酒にたふりやうのふりやうのふりやう

おき

きやふりやうのふりやうのふりやう

あつたふりやうのふりやうのふりやう

あつたふりやうのふりやうのふりやう
あつたふりやうのふりやうのふりやう

内

あつたふりやうのふりやうのふりやう

あつたふりやうのふりやうのふりやう

あつたふりやうのふりやうのふりやう

あつたふりやうのふりやうのふりやう

あつたふりやうのふりやうのふりやう

大剛

大剛よりすまの馬付子ハ心包一
あうりこーとえりて、あまとい
こーとあまのりつ、羊、席、あ
こあひてはうーしりあの新
ハ、うーしりあ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ

あまのりつ、あまのりつ

あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ

あまのりつ、あまのりつ

あまのりつ、あまのりつ

あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ
あまのりつ、あまのりつ、あまのりつ

名録

ふまに初まのえか 一 部 二

昔昔のうゑあめさかへく 馬 三

ふいふ

ふまのうゑあめさかへく 四

あめさかへく 五

あめさかへく 六

あめさかへく

あめさかへく 七

あめさかへく 八

あめさかへく

あめさかへく 九

あめさかへく 十

あめさかへく 十一

あめさかへく 十二

あめさかへく 十三

あ

あ

を師川のふりゝる坂の所
うらハあハのらあわのまねの
社中の昔よりひきまゝ一
里程をさへ一アそへハ情を
少く溜ま

流石として世はまらしく
あつたに 物か場

はまのまゝにふりまゝのそへま
佐笑のまねのまらしく十二の
わらわらふまゝにふりまゝ

折々一見あはれたまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに

川はまゝにまゝにまゝに

まゝに 店內

まゝにまゝにまゝにまゝに
あつたまゝにまゝに

流の月影はまゝにまゝに

二句書

三川

そのへいにおもひこころは

物まのわらひのゆるい松後

船渡のまぢよをのぬとけ

くふぬまの遠くをよと

花のまはりのさうとけ

世帯のいしよとく

美の徳よ初鷹一羽く

中一ありもの志はると

三

三句書

ころりりちちちちちちち

よのまのひとちちちち

ころりりちちちちちち

のひとちちちちちち

はつちちちちちちち

日記

ふつふつとふつとふつと
たふもふもふもふもふも
おんふつとふつと

おんふつとふつとふつと

おんふつとふつとふつと

おんふつとふつとふつと

おんふつとふつと

おんふつとふつとふつと

おんふつと

おんふつとふつとふつと

おんふつとふつとふつと

おんふつとふつとふつと

おんふつと

おんふつと

おんふつとふつとふつと

おんふつとふつとふつと
おんふつとふつとふつと
おんふつとふつとふつと

あつらふくくさるるのこころなほ
あつらふく

ふらふ

布坂

あつらふくくさるるのこころなほ

あつらふくくさるるのこころなほの

あつらふくくさるるのこころなほ

あつらふくくさるるのこころなほ

あつらふくくさるるのこころなほ

あつらふくくさるるのこころなほ

名録

あつらふくくさるるのこころなほ

あつらふくくさるるのこころなほ

あつらふくくさるるのこころなほ

あつらふくくさるるのこころなほ

あつらふくくさるるのこころなほ

あ

あ

ちよよき人下り勝も水舟遊む人
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 こぼれもさしけり人静し縁も遊ば
 ちい御もさしけりさし人静も
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 物一遊むもさしけり人静も
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく

うたの侍奉納

ここの舟もさしけり人静も
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく
 けりゆくくらぬむしー面をゆく

十はるをまきあつた北へ入る
くらに一度八やとちあか
そがせ、まがらひきまのめあひら
ちーはくくくくくくくくくく
きりいん流輪たりのをのた
あひたーまを流みーこそ
あし

あひたーまを流みーこそ
あし
あひたーまを流みーこそ
あし

西のロムベヌのまがらひきまのめあひら
きりいん流輪たりのをのた
あひたーまを流みーこそ
あし
あひたーまを流みーこそ
あし
あひたーまを流みーこそ
あし
あひたーまを流みーこそ
あし

蒸すものぶり業ありら車あり

水車をききかきらすも路り

伝すし海にききりんらるる 蒸す

短くさく 蒸す

名にたにききりんらるるあり

たのききりんらるるあり 松後

酒にたにききりんらるるあり 杜重

たのききりんらるるあり 蒸す

海にたにききりんらるるあり 雲方

葉にたにききりんらるるあり 蒸す

おにたにききりんらるるあり 蒸す

たのききりんらるるあり 蒸す

蒸すにたにききりんらるるあり 蒸す

蒸すのたにききりんらるるあり 蒸す

蒸すにたにききりんらるるあり 蒸す

蒸すにたにききりんらるるあり 蒸す

後 山 仙 臺 松 苑 山
 深 淵 之 水 流 之 聲
 清 涼 之 氣 爽 心 之 神
 福 之 流 澗 之 水 清 涼
 後 苑 之 水 流 之 聲
 清 涼 之 氣 爽 心 之 神
 福 之 流 澗 之 水 清 涼

史 松 苑 山
 後 苑 之 水 流 之 聲
 清 涼 之 氣 爽 心 之 神
 福 之 流 澗 之 水 清 涼

名 録

二ノ目 名 録

入 苑 之 水 流 之 聲
 清 涼 之 氣 爽 心 之 神
 福 之 流 澗 之 水 清 涼

海から来たものか、海へ行くものか、
呂宋

海から来たものか、海へ行くものか、
津島

海から来たものか、海へ行くものか、
柳土

海から来たものか、海へ行くものか、
口島

海から来たものか、海へ行くものか、
白川

海から来たものか、海へ行くものか、
三上

海から来たものか、海へ行くものか、
赤松

海から来たものか、海へ行くものか、
植史

海から来たものか、海へ行くものか、
柳洞

海から来たものか、海へ行くものか、

海から来たものか、海へ行くものか、
松後

海から来たものか、海へ行くものか、
赤松

海から来たものか、海へ行くものか、
長崎

海から来たものか、海へ行くものか、
二電

海から来たものか、海へ行くものか、
妙島

海から来たものか、海へ行くものか、
三上

換りぬきもさむら反故一巻
 柳カ
 纏櫃カの這が代カのカ
 柳枝
 ぬれひるもむの腹カのカ
 松カ
 むのぬの雨カのカ
 有皇
 ぬりぬカのカ
 葉カ

名録

はなはな園の中

久花カのカのカ
 左カ

極貝カのカのカ
 氏秋
 葉カのカのカ
 石カ
 あカのカのカ
 柳カ
 松カのカのカ
 柳枝
 いカのカのカ
 妙カ
 後カのカのカ
 松カ
 一カのカのカ
 二カ
 葉カのカのカ
 葉カ

さへおまをききしにさへはつておまをき
まへのおまをきしにさへおまをき
さへおまをきしにさへおまをき
さへおまをきしにさへおまをき

油の備のりおまをき

さへおまをきしにさへおまをき
さへおまをきしにさへおまをき
さへおまをきしにさへおまをき

さへおまをきしにさへおまをき
さへおまをきしにさへおまをき
さへおまをきしにさへおまをき

梅

さへおまをきしにさへおまをき

さへおまをきしにさへおまをき
さへおまをきしにさへおまをき
さへおまをきしにさへおまをき

おまをき
おまをき



ふらふら

一丁

ふらふらふらふらふらふらふらふらふら

豫の玉館とたむ所か
松屋

若者といはれし者
陸皮

そのまはり
あは

ふらふらふらふらふらふらふらふらふら
柳坡

ひらき
ふらふら

名録

お袋のふらふらふらふらふらふらふらふら
陸皮

瑞午のふらふらふらふらふらふらふらふら
柳坡

世はふらふらふらふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

Handwritten text in a cursive script, likely a signature or a short note, located on the right page of the manuscript. The text is written in dark ink and consists of several lines of flowing, connected letters. The first line appears to be a name, possibly "John" or "James", followed by a second line that could be a title or a date. The third line is shorter and more decorative, and the fourth line is the longest, ending in a flourish.

